

日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 30 号

<目次>

巻頭言	…1
特集 〈台湾研究〉を発信する	…3
追悼	…11
学界動向	…16
日本台湾学会活動報告	…17

巻頭言

鴻海によるシャープの買収に際して

日本台湾学会理事長 佐藤幸人

今年の1月半ばから2月初めにかけて、台湾関連のニュースが次々と日本のメディアを騒がせました。はじめは選挙、次に鴻海精密工業によるシャープの買収、そして南部での地震です。最後はなければよかったニュースですね。改めて亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。

選挙については学会の内外で多くの人が文章を書かれたり、報告されたりしていますので、専門でもないわたしが何かを書く必要はないでしょう。ここでは恐らく大部分の会員の方にとってはあまり縁がないであろう鴻海によるシャープの買収に

絡めて、日頃考えていることを書こうと思います。

まず鴻海について簡単な説明から。鴻海は電子製品の部品の製造からスタートし、今では世界最大のEMS (Electronics Manufacturing Service)と呼ばれています。EMSとはブランドを持っている企業から委託されて電子製品の製造を行うというビジネスのことです。ですので、鴻海がつくったものは顧客のブランドで販売され、一般のユーザーには鴻海がつくったことはわかりません。

最大の顧客はアップルです。iPhoneの半分以上は鴻海が組み立てています。ソニーや任天堂も鴻海に製造を委託しています。最近ではソフトバンクのロボット、ペッパーも鴻海製です。

こういったスタイルのビジネスが1990年代以降、世界で急速に発達しました。その覇者が鴻海です。今や売上高は約16兆円に達し、中国をはじめ世界各地に工場を持ち、従業員は100万人以上いるとみられます。

ここからが本題です。これまで日本での報道では、電子産業の黒子役である鴻海のことを「下請け」と呼ぶことがしばしばありましたが、それについてかねてより疑問を持っていました。「下請け」をどう定義するかにもよりますが、一般的には顧客の大企業に従属し、その命令に唯々諾々と従う、果ては虐げられ搾取されているというイメージが強いのではないのでしょうか。

確かに鴻海とアップルの関係では、アップルの立場が強く、鴻海はアップルに気に入られるため

に多大な努力を続けています。しかし、一方ではアップルが鴻海を簡単に切ることができるとは考えられません。両社の関係には水平的なパートナーという面もあります。そもそも売上高 16 兆円の企業を「下請け」と呼ぶことにはかなり違和感があります。

今回の報道では「下請け」はほとんど使われませんでした。皆無ではありませんでした（先ほどみた「クローズアップ現代」では複数回使っていました）。日本のメディアは、鴻海が日本でいう「下請け」とは異なることはわかっていると思います。それでも「下請け」と呼ぶ主たる理由は、EMS について馴染みのない読者や視聴者にもわかるように説明するためだと考えられます。

しかし、そうだとすると、鴻海を「下請け」と呼ぶことには落とし穴があります。1990 年代以降、世界経済、特に電子産業の仕組みは大きく変わり、その一環として EMS は台頭しました。ところが、そのことは日本ではあまり一般的には理解されていないようです。それゆえ、昔ながらの仕組みを前提に理解しようとする、鴻海を「下請け」と呼ぶしかなく、実際の姿とはずれてしまいます。

しかも問題は累積的です。メディアが古い枠組みを使って説明し続けるかぎり、読者や視聴者の考え方もなかなか変わりません。読者や視聴者の考え方が変わらなければ、メディアは彼らに理解しやすいように古い枠組みの使用を継続するでしょう。こうなると、実際の動きと日本での一般的な理解のギャップは広がるばかりです。

また、メディアの理解にも依然として不安は残っています。今回、鴻海を「下請け」とは呼ばないものの、鴻海がシャープを手に入れた目的は、黒子役に甘んじることなく、ブランド・ビジネスを始めるためだともとれる解説がありました。これはブランド・ビジネスの方が EMS よりも進んでいる、あるいは優れているという見方ですが、果たして妥当でしょうか。

確かに台湾でもかつては、エイサーなどが熱心に自社ブランド事業の育成に取り組んでいました。しかし、1990 年代以降の台湾では、自社ブランド事業が思ったように伸びないなか、EMS や OEM (Original Equipment Manufacturing) / ODM

(Original Design Manufacturing) といった受託事業が飛躍的に成長しました。今の台湾でも自社ブランド事業の重要性を指摘する見方はありますが、EMS や OEM/ODM を「下請け」としてみることはないでしょう。

一方、日本ではブランドを持つ大企業のヘゲモニーが続きましたので、ブランド・ビジネスを EMS の「上」に置くような、旧態依然とした考え方が広く、根深く残りました。そのため、メディアの記者たちも無意識に枠組みとして使ってしまうのかもしれない。

ここにわたしたちのような専門家が果たすべき役割があると思います。鴻海を「下請け」と呼ぶことがミスリーディングであることを、間接的にはメディアに働きかけて報道のしかたを変えることによって、直接的には一般の人とのコミュニケーションを通じて伝えていくという役割です。以前と比べて日本の報道で鴻海を「下請け」と呼ばなくなったのはその効果かもしれません。

わたしたちがこのような役割を果たせるのは、台湾の人々や社会と頻繁に接し、自分自身の見方を揺さぶられる機会が多いからです。わたし自身、思い起こせば設立からおよそ 1 年を経た TSMC を 1988 年に初めて訪ねた時、ファウンドリ（半導体の製造受託事業のこと）専業という聞いたこともないビジネスモデルに出くわしてずいぶんと当惑しました。半導体の設計と製造を切り離すという発想がなかったからです。最近やや感受性が鈍っている感じもしますが、これからも台湾で出会った驚きを日本に伝え、日本のものの見方を揺さぶることができればと思います。

特集

〈台湾研究〉を発信する

キリスト教史研究者として 〈台湾〉を発信する

高井ヘラー由紀

私は「台湾キリスト教史」を専門としている。おそらく多くの研究領域で共通することだろうと思うが、キリスト教研究の世界でも台湾という存在に対する認知度は極めて低い。東アジアのキリスト教をテーマとする研究会・学会等においてさえ、台湾は、キリスト教的にも「大国」になりつつある中国と、キリスト教人口が30~40%となつて久しい「東洋のキリスト教国」韓国の影に隠れ、しばしば看過されがちである。西洋キリスト教世界は「中国」に対して並大抵ではない関心を持ち続けてきた。中華人民共和国成立後、中華民国台湾が「自由な中国 (Free China)」(民主的のみならずキリスト教宣教の自由が確保されているという意味において)として注目を浴びた一時期もあったが、中華民国が国連から脱退した1970年代、そして中華人民共和国の改革開放路線にもとづき中国基督教協会が世界教会協議会に復帰した1990年代を経て、台湾が注目される時代は基本的に過ぎ去ったといえる。近年の中国におけるキリスト教の著しい台頭、それに対して台湾のキリスト教が人口比でいえば低い割合にとどまっていること、台湾の国際社会における地位が定まらず、また台湾社会内部が複雑なことも相まって、キリスト教関係者一般の台湾に対する関心と理解は極めて低いレベルにとどまっている。

このような状態に対し、私自身、元来日本統治期が研究対象だったこともあり、「台湾のキリスト

教」の全体的なイメージをなかなかつかめなかった。しかし、ここ2~3年、戦後の状況を調査する機会を得て、ようやくその全体像を自分なりに把握できるようになり、そのタイミングで昨年、立教大学大学院キリスト教学研究科「アジアキリスト教演習」で台湾のキリスト教を講じる機会をいただいた。また、同じく昨年8月、会津若松で行われた日本キリスト教団系の「湖畔聖書学校」という一泊の研修会において、アジアのキリスト教に関する学びの一貫として、台湾のキリスト教に関する講演を依頼された。

前者の大学院の授業は春学期に行われ、受講登録したのは修士の学生一名のみだったが、それ以外に聴講の大学院生が三名あった。幸い、いずれも熱心に授業に参加してくれ、充実した講義、発表、ディスカッションの時間を持つことができた。それぞれの台湾への関心は多様で、YMCAの交流事業で台湾を訪ねて以来関心を持ち続けていた、米国の神学校で「文脈化神学 (contextual theology)」に触れ関心を持った、韓国のキリスト教との比較、戦前台湾のホーリネス教会に対する関心、などであった。ほとんどが台湾に関する予備知識を持っていなかったため、特定の文献を読み進めるのではなく、概論的なことから講義であらかじめ説明し、受講生/聴講生は自分の関心あるテーマを調べて発表するという方式をとった。講義では台湾の政治的社会的状況の複雑さと、それに輪をかけて複雑なキリスト教の現状とを丁寧に説明し、今日の台湾キリスト教が置かれている文脈を理解してもらうことを第一に心がけた。その後は、自分の論文や他の研究者の論文などを、学生の発表と織り交ぜながら紹介していった。このプロセスの中で強く感じたのは、議論をするための土台作りとして、前提となる台湾の文脈について時間をかけて説明することの重要性である。この点に加えて、講義の準備や学生の発表を通して印象に残った点が二つある。一つ目は、台湾のキリスト教における原住民のプレゼンスについて、そして二つ目は文脈化神学の意義についてである。第一に、キリスト教は確かに漢民族の中では常にマイノリティであったが、原住民の間では戦後、「東洋の奇跡」と称されることもある、稀有な集

団改宗の現象が見られ、人口のほぼ 100%がキリスト教徒となった経緯がある。今日ではその割合は若干下がってはいるものの、原住民キリスト教が台湾キリスト教における大きなファクターであることは間違いない。彼らがなぜ比較的近年まで教会においてリーダーシップを執ることがなかったのかという問いや、人口比でいえばごく少数であっても、その 100%近い構成員がキリスト教を信仰しているケースが台湾に存在してきた歴史的・宗教的・文化的意義の重要性に、今更ながら気付かされたのである。一方、「文脈化神学」については、学生の発表を通して、台湾を代表する神学者、黄章輝が、アジアそして世界に提唱した「非西洋的」な神学的枠組みの意義を再確認すると共に、そのような「非西洋的」神学の営みが西洋の神学的伝統に依拠せざるを得ない矛盾について考えさせられた。とはいっても、「文脈化神学」は今日では世界的な神学的潮流となっており、そのインパクトの大きさは計り知れない。それが台湾から出発した神学だということが、台湾の文脈と結びつけてもっとアピールされるべきではないかと思ったが、その考えは、以下に述べる8月の講演に活かされることとなった。

キリスト教会関係者の集う研修会「湖畔聖書学校」でのこの講演は、元来、韓国のキリスト教についての講演を関係者が別の研究者に依頼していたのが急遽キャンセルになり、その研究者の紹介で話が回ってきたものである。したがって依頼者は、台湾だけについてではなく、ひろくアジアについての話を希望していた。しかし漠然とアジアについて話すよりも、台湾の具体的な話を通してアジアを理解する方向の方が良いと思われたので、「台湾からみたアジアのキリスト教」というタイトルで、1) 台湾とは何か、2) 台湾からみえるアジア、3) 台湾から発信されるキリスト教、の順に話をした。特に工夫したのは二番目の部分で、韓国・中国・香港・北朝鮮と台湾の共通性および相違性を示すことによって、台湾や台湾のキリスト教を把握し

てもらおうと考えた。韓国でいえば、日本による植民地統治、1970年代以降の民主化闘争、統一問題などの共通ファクター。香港では、「中国」に返還された植民地、リージョナリズム vs 親中主義、2014年の市民革命など、同様に共通ファクター。中国と台湾の場合には、正統的「中華」への志向、「漢 vs 夷」など、中華ファクターの共有が見られる。さらに北朝鮮も含め、これらの地域すべてにおいて、キリスト教における「親体制 vs 反体制」のせめぎ合いという共通課題が存在する。このようにして、台湾を含む「東アジア」キリスト教の置かれたさまざまな文脈の連続的なあり方が、それぞれのキリスト教を横断する共通の特色を生み出していることを示すよう努めた。一方、台湾から発信されたキリスト教として、上述の「文脈化神学」を紹介した。興味深いことに、この講演に対する最大のフィードバックは、同じく講演者として招かれていたインド・マニプール州の少数民族女性からのものであった。マニプール州の少数民族は 100%キリスト教であるが、非少数民族者からの差別に苦しめられてきた。台湾では、差別を受けてきた民族の直面する言語的文化的アイデンティティの流失に、キリスト教がどう向き合かが切実な問題であると説明したのであるが、自らの民族の置かれている状況と重なることもあって、台湾のキリスト教に関する話を非常に興味深く聞いたという。台湾が東アジアという領域を越えた越境的な問題を呈示する存在であることを、強く意識した出来事であった。



▲「湖畔聖書学校」のひとつ

台湾平埔族の文化資源を テーマとする展覧会

早坂文吉（天理大学附属天理参考館）

筆者が勤務している天理大学附属天理参考館（以下、当館）は、世界の生活文化・考古美術の博物館で、台湾先住民に関する資料（文化資源）を約2100点収蔵している。筆者はこれらの資料を担当し、資料の整理、保存、研究、展示を主に行っている。

筆者はこれまで台湾先住民の中でも、平埔族の文物に注目してきた。2014年には当館において平埔族に関する企画展を開催した。博物館における平埔族に関する資料の公開、展示活動を振り返ることで、「〈台湾〉を発信する」という営みにまつわる一端を紹介できればと思う。

台湾の先住民グループのうち、西部平野に住んでいる「平埔族」と呼ばれる民族グループは、17世紀以降の中国大陆からの移民による漢民族化、キリスト教への改宗、文明社会との融合が進み、独自の言語や生活文化は大きく変容、または失うことになった。台湾では1980年代後半からの民主化に伴い、先住民の伝統文化を保護するようになった。平埔族の人々もわずかに残った彼ら特有の言語、習慣や、生活文化の記憶を辿る「モノ」を通して、自らのアイデンティティを探ろうとする動きを活発に行っている。しかし現在でも平埔族の各グループは、政府に認められておらず、近年、平埔族の原住民族への復権運動が盛んに行われているところである。

現在、台湾現地で平埔族独自の伝統的な生活文化を見ることは非常に難しくなっている中で、当館の平埔族に関する資料は333点を数える。研究者によって存在が確認されている10数グループの平埔族の中で、パゼツヘ族、シラヤ族の文物が中心となっている。清朝時代の契約書で、平埔族の貴重な歴史史料でもある「岸裡文書」、「新港

文書」をはじめ、古地図、首長一族の絵図の他、生活文化資料ではシラヤ族の宗教祭祀具、20世紀前半頃までの衣服、服飾品がその多数を占める。その質、量ともに台湾の博物館をも凌ぐ内容である。平埔族による自己のアイデンティティを主張する動きが活発になる中、台湾の大学や研究所、博物館などによる当館への注目度は年々高まっていった。

希少価値が高く、当館でしか見ることができない、というのは展覧会を開催する上で大きな魅力となる。しかしながら、これらの資料はそれゆえに類例を見ないものが多く、さらに収集時に、資料一点一点の細かな使用年代、出所、用途といった、まとまった情報が残っているものはわずかであった。博物館資料として情報を備えず、そのモノが何なのかかわからないままでは公開、発信が難しい状況であった。平埔族資料は1960年代から当館に収蔵されているが、長らくその全容を公開することができなかつたのはこうした背景があったからであろう。

平埔族の「モノ」に注目が集まり出す中、新たな局面を迎えたのは2009年のことであった。平埔族の歴史文化に精通されている台湾国立暨南国際大学の鄧相揚先生が、天理大学国際学部の下村作次郎先生の案内で来館され、当館の文書、古地図類に強い関心を示された。そして、台湾先住民研究に造詣の深い下村先生と魚住悦子先生（国際交流基金職員）、当館の吉田裕彦氏とで研究チームを結成し、台中市、南投県のパゼツヘ族および、



▲ パゼツヘ族の絵画、文字史料

台南市のシラヤ族の現地調査を行うことになった。現在の平埔族の人々の記憶を辿り、生活に使用された道具、衣服についての聞き取りを試みるも、時代が大きく変容していくうねりの中で、やはり伝統的な日用生活品は、彼ら平埔族の人々の手から離れ、その作りさえ忘却されている現実があった。一方で、これまで詳しい資料情報を欠いていた古文書、古地図、絵図類は、その全貌を明らかにすることができた。資料の公開に至る過程には、こうした日台の方々との出会いのご縁があり、館外の協力者、現地の平埔族の方々のお力添えのもとに調査研究が大きく進展することとなった。

展覧会に先立ち、当館で収蔵している平埔族資料全点をカラー写真で掲載した図録『資料案内シリーズNo.30 台湾平埔族、生活文化の記憶』を



▲ パゼツへ族の伝統的な民族衣装

2012年に刊行した。そして、2014年10月から2ヶ月間、当館において第73回企画展「台湾平埔族のものがたりー歴史の流れと生活文化の記憶ー」を開催した。当館は大学附属の施設ではあるが、大学関係者のみならず、広く一般の見学者の方にも公開している。平埔族の存在が、台湾社会の中で注目が集まってきたのも民主化以降、ここ20年ほどの話である。「平埔族」という言葉自体の認知度が極めて低い、異国である日本で、こうした民族グループの歴史文化を紹介するあたり、一般見学者の方の目線も考慮した展示を心掛けた。まずは、台湾で古くから暮らしている先住民族の中の平埔族というグループの存在を知ってもらうことを第一に考えた。その為、学術的な成果報告の場に偏ることなく、出来るだけ分かり易い解説になるように努めた。展示キャプション以外にも漫画のガイドブックを作成した。次に、展示する平

埔族の生活文化資料のほとんどは、現在では台湾現地で既に見ることが難しい、という点だが、過去の歴史的資料としての価値のみに重きを置くのではなく、そのモノを使用していた人々の子孫の現在にもスポットを当て、今に生きる平埔族の人々の状況を合わせて紹介するようにした。また単にモノを展示するのみならず、現地調査を踏まえ、伝統的な祭祀の復活、言語教育、原住民族への復権運動の様子などを写真パネル、映像にして今日の平埔族の人々の姿に迫った。

この展覧会開催は、日本のみならず台湾、そして平埔族の人々からも反響があった。見学者の中

には、いくつかの台湾の大学、研究者の姿もあり、シラヤ族の末裔の方もそのメンバー内におられた。「自分たちの祖先がかつて使用していたモノが、日本の博物館にあるとは思いませんでした。しかし、

これだけのモノが現在に至るまでしっかりと保存されていることは、伝統的なモノを排除する時代があった台湾では不可能であった。」との感想を頂いた。また調査時、現地では彼ら独自の民族衣装の織の技法も忘れ去られていたが、パゼツへ族の人々から自分たちの衣装の復元に、当館の衣装を参考にしたいとの要請があった。この調査、展示活動を通じ、当館の資料が、今に生きる平埔族の人々にとっての貴重な文化資源であることを再認識する機会になったのと同時に、当館の資料を用いて、自分たちの衣装を自らの手で復元するという営みは、今後の博物館資料の保存、活用についての新たな方向性が示されていると言えるだろう。

当館は国内で、台湾を常設展示のコーナーとして設けている数少ない博物館でもある。今後も博物館資料「モノ」を通して、台湾の生活文化の紹介、発信に努めて参りたい。

ドキュメンタリーに見る

現代台湾の光と影

—台湾ドキュメンタリー特集の主催に当たって—

許時嘉 (山形大学)

1990年代以降、台湾ではドキュメンタリーの制作が盛んになり、多くの監督が優れた作品を次々と生み出し、映画界が低迷した時期に、映像創作の業界における牽引役となっていた。2003年、台湾国産シネマの年度売り上げ No.1 を果たしたのは一般の劇映画ではなく、呉乙峰監督の921震災ドキュメンタリー『生命 (いのち) ——希望の贈り物』であったことは、その事実を裏付けている。同時代に生まれた数多くのドキュメンタリーは現代台湾社会の歩みを理解する重要な一次史料であるにもかかわらず、台湾ドキュメンタリーに関する全面的な学術研究は、日本ではまだ十分展開していない、とこれまで強く感じていた。

山形大学人文学部に赴任した後、台湾国内の映画資料館以外にも、それらの作品の大半が山形ドキュメンタリー映画祭事務局運営の「山形ドキュメンタリーライブラリー」に所蔵されていることに気づいた。山形大学人文学部は山形ドキュメンタリー映画祭事務局の協力組織である。これまで東ヨーロッパ、韓国など地域ごとにドキュメンタリーの調査を行ない、調査結果の出版など実績を上げた。その経験を生かして、職場の同僚たちとともに「山形ドキュメンタリーライブラリー収蔵台湾作品の調査研究」プロジェクトを企画し、二年間にわたって同ライブラリーに眠っている300余本の台湾ドキュメンタリーを対象に調査を行なった。そうした準備的な調査を踏まえ、山形ドキュメンタリー映画祭開催期間中の2015年10月9～11日にわたり、台湾ドキュメンタリー特集「映像は語る——ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影」を開催した。台湾文化部和台北駐日経済文化代表処、りそな財団、山形ドキュメンタリー映画祭事務局の支援の下で11本のドキュメンタリー公開上映と監督トーク、国

際シンポジウムを実施したのである。

企画の段階では、もう一人のコーディネーターである山形映画祭事務局理事の藤岡朝子氏と企画の骨子について意見交換した。90年代以降、映画よりも飛躍的な発展を果たした台湾ドキュメンタリーに焦点を合わせて、社会的、政治的脈動との関わりを企画の中核とし、戦後台湾社会の独特な多元性を映し出す鏡として浮き彫りにする、という方針を定めた。この方針に従って、上映に選ばれた作品は、政治に翻弄される人々の生身(国民党の老兵、大地震の被災者、WTO加盟で苦しむ農民)を記録した作品や、マイノリティのアイデンティティを肯定する自己表現のツールとなった作品であった。さらに、一般の日本人観客に分かりやすく理解してもらうため、LGBTや先住民が自らの表現を獲得していった運動と作品について、周美玲監督、劉芸后監督、マーヤウ・ビーホウ監督を招いて話を聞かせて頂くほか、映画史から台湾社会の歩みを見つめる『あの頃、この時(那時・此刻)』の初公開を果たし、楊力州監督にも撮影のエピソードを紹介頂いた。最終日には、「ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影」と題するシンポジウムを開催し、李道明(台北芸術大学)、陳斌全(朝陽科技大学)、陳儒修(国立政治大学)、三澤真美恵(日本大学)諸教授から近年の台湾ドキュメンタリーの特徴と問題点について、それぞれ講演を行って頂いた。この後、葉月瑜教授(香港浸会大学)に司会を勤めて頂き、四人の監督に再び登場願ひ、ドキュメンタリーの劇場上映の是



▲ マーヤウ・ビーホウ(中央)の監督トーク。司会=藤岡朝子(左)、通訳=秋山珠子(右)。

非について大いに語り合ってくることができた。このようにして映像にみる戦後台湾社会の変容を明らかにするばかりではなく、ドキュメンタリー映像の比較社会史と映像学の比較研究に関する新しいアプローチを同時に提示することを意図した。研究発表の内容は後日出版予定の論文集に譲りたいが、ここでは監督トークについて印象に残るエピソードについて触れておきたい。

10月9日午後上映した楊力州監督の『あの頃、この時』（2015年）は台湾戦後の歴史的、文化的な歩みを一人ひとりの映画ファンのインタビューによって構築したものである。楊監督はトークで、台湾戦後映画研究の大半は作品自体に集中しすぎて、映画ファンの存在は映画産業に欠かせないものにもかかわらず、これまでほとんど看過されてきてしまったと指摘した。ある意味では、観る側の体験談を土台とすることによって、個々人の歴史記憶を国家主導のマクロ歴史の叙述から解放しようとする意図も含ま



▲マーヤウ・ビーホウ監督『これぞ人生、これぞアミ族』の映像写真（マーヤウ監督提供）。

れるだろう。一般の日本人観客はこの映画を通して戦後台湾史の重層的な歴史認識を垣間見ることができたらと期待する。

10月9日夜には、周美玲、劉芸后監督『コーナース』（2000年）の作品上映と監督トークを行った。『コーナース』はレズビアンの本物のセックスシーンが当時話題になり、台湾同性愛者ドキュメンタリーの代表作とあっていい貴重な作品である。これまで公開上映に当たっては上映規制によってカットを入れるのが普通だったが、今回は日本で初めてカット無しのフルバージョンを上映した。「同性愛者の愛欲や性的関係は普通の異性愛者のそれと何も変わらない」というこの作品の一番伝えたいメッセージを忠実に反映しようとして、藤岡さんといろいろ検討し、フルバージョンの上映に無事こぎ着けた。監督トークでは周監督と劉監

督は同性愛者への差別、カンミングアウトできない現実、性愛場面作成などの秘話を詳しく語って下さった。フロアからは、生殖に繋がらない同性愛者の性的関係など理解不可能、という保守的な意見もあったが、周監督は同性愛が大自然の動物界でも普通に見られる、生まれつきのものであると述べ、ヘテロセクシュアリティを常識視する観念の人為性と虚偽性を見事に指摘した。

10月10日夜に、マーヤウ・ビーホウ監督は台湾先住民を取り上げたドキュメンタリー映画、『これぞ人生、これぞアミ族』と『酒宴の男たち』の上映後に登壇した。自分自身はアミ族とよく言われているが、実は「パンツァ」族であることを認識してほしいと、マーヤウ監督は語り始めたのは、

外部の人々から伺うことのできない、台湾先住民のエスニシティーの複雑さを浮き彫りにしている。近年、映画監督の道から離れて政治活動に転向したマーヤウ監督は、漢民族文化の侵入と統治者の一元化された教育政策によって、台湾の先

住民が自分自身の伝統文化とアイデンティティを失っていく状況を熱く語った。

興味深いことに、議員選挙のための政治運動をやめ、優れた品を撮り続けてほしいという観客の意見があった。それに対して、マーヤウ監督は、文化的影響力が百年も続く映像作品を撮ることはもちろん大事だが、それに比べて先住民の社会問題は今のうちに解決しないといけないものだ、と答えた。過去のすべての痕跡に向き合って歴史的な文脈を冷静に整理するのは歴史研究者の仕事である。しかし、あの痕跡が過ぎ去ったものではなく、常に現在進捗しつつある文化的事象や生成中の社会意識と絡んで増殖している場合、われわれはどう向き合うべきだろうか。マーヤウ監督のあの言葉が改めていろいろ考えさせてくれた。

沖縄で「台湾」を考える／発信する

—これまでの取り組みと今後の展望—

石垣 直 (沖縄国際大学)

はじめに

今回、日本台湾学会のニュースレター用に、「学術研究とは異なる次元で〈台湾研究〉・〈台湾〉を発信する取り組み」を紹介するという「お題」をいただいた。私の教育経験はまだ浅く、学会諸氏へ紹介するに足る取り組みを実践できているか甚だ不安である。しかし、個人的な取り組みや沖縄と台湾の関係を整理することは、自己の教育・研究上の立ち位置を再考する良い機会でもあろうと考え、この小文を綴ることを決意した。以下ではまず、これまでに私が実践してきたいくつかの取り組みを紹介し、続く節において、今後の展望も踏まえながら、沖縄で「台湾」を考える／発信することの意義について考えてみたい。

これまでの取り組み

私が所属先する沖縄国際大学には、残念ながら、台湾の歴史・言語・文化に特化した講義・演習（ゼミ）は存在しない。部分的に台湾を扱う講義・ゼミとしては、共通科目の「文化人類学Ⅰ・Ⅱ」、私が所属する総合文化学部社会文化学科の専門科目である「比較民俗学」、「アジア文化概論」、「アジア社会文化論Ⅰ（中国）」、「文化人類学概論」、「文化人類学理論」、「沖縄文化入門」、「領域演習（民俗学・人類学）」、「人類学ゼミ」（演習Ⅰ・Ⅱ）などがある。このうち私は、「比較民俗学」を除く全ての講義・ゼミを担当（あるいは一部に参与）している。これらの講義・ゼミでは扱うテーマ／トピックの一事例として台湾の状況を紹介するに止まるが、特に「アジア文化概論」では、数回にわたって台湾の状況（eg. 概要、歴史、原住民の社会と文化、諸外来政権による統治と本土化・原住民運動、etc.）について、映像資料も利用しながら言及している¹⁾。

私はこれらの講義・ゼミの際に、沖縄に住む我々の「最も近い隣人・隣国」である台湾に対する知識がいかにか乏しいか、そして台湾を参照点として

改めて沖縄の歴史や文化を考えることがなぜ必要であるのか、ということ強調している。正直に言うならば、受講生らが私の問題意識をどこまで理解できているか心細いところもある。しかし、かれらのリアクション・ペーパーから判断する限り、私の問題意識・強調点の一端は、その多くが沖縄県出身者である本学学生が「沖縄歴史・社会・文化を相対化する」うえで、ひとつの刺激にはなっているようである。

私が実践してきた「台湾を発信する」この他の取り組みとしては、昨年（2015年）から実施している人類学ゼミの海外研修がある。私の所属学科では、ゼミ毎に、沖縄県内各地での調査実習（必修）を実施してきた。「沖縄を徹底的に学ぶ」という所属学科のポリシーや予算の関係もあり、私はこれまで沖縄島北部の諸村落で調査実習を実施してきた。しかし、学生に「アジアのなかの沖縄」を考えてもらいたいという意図から、2015年9月初旬に4泊5日の日程で人類学ゼミ3年生を中心に9名の学生を引率した台北研修を実施した。滞在中は、総統府／故宮博物院／順益原住民族博物館などの主要施設、龍山寺／孔子廟／行天宮他の宗教施設を参観し、また華西街／士林／台湾師範大前の各ナイト・マーケットも訪問して、学生に対し中国・台湾の歴史や中国文化の沖縄への影響について解説した。今回の台北研修ではさらに、政治大学民族系ならびに台北医学大学医学人文研究所を個別に訪問した。各大学・研究機関において私のゼミ学生が「沖縄の歴史と文化」に関する発表を行い、台湾側からはそれぞれ、原住民の地理・環境知識や福祉問題に関する研究発表があった。なお、参加したゼミ生らは帰国後に準備を重ね、台北研修の成果として2016年1月に学内で1週間のポスター展示を行った。

他方、私は学外で「那覇日台親善協会」の活動に参加している。2015年11月17日に発足した同協会は、沖縄県内に住む台湾華僑・華人、そして長年にわたって台湾側と交流を深めてきた沖縄県内に住む約260名の方々（うち法人会員は2割強）によって構成されている。発足後まだ間もないこともあり、具体的な成果はこれからであるが、私に関わる交流イベントとして、すでに台東県海

端郷広原国民小学校の原住民（ブヌン）児童（布農族歌舞謡団）の来沖が決定し、那覇市立さつき小学校児童との国際文化交流会、および沖縄国際大学訪問が予定されている（6月末）。

近年における台湾と沖縄の文化交流としては、私に関わるもの以外にも、音楽・芸術交流、双方の国際マラソン大会への参加およびサポートなど、さまざまなものがある。これらの多くは民間交流が主体であるが、これまでに実践されてきた多様な試みを那覇日台親善協会としてどのように結び付けていくことができるのか、そして学術・研究分野で活動してきた私たちがこれらの活動をどのようにサポートできるかが、今後の課題である。

沖縄で「台湾」を考える／発信する

前節でも触れたように、私が沖縄において「台湾を発信する」際に常に念頭に置いているのは、沖縄で「台湾」のことを学ぶ意義は何かという点である。これまでの私の調査対象は主に台湾原住民であったため、沖縄との直接的な比較は行ってこなかった。しかし、中国や日本という文明・大国と歴史的に深い関わり合いを持ちつつも、本格的な包摂・併合が行われたのは近代のことであるという点で、両者の歴史的経験には類似性もみられる。中国大陸の文明・政権に対する台湾漢族や原住民の複雑な立場は、「大和と琉球・沖縄」の歴史的・現代的な関係を考える上でも、ひとつの比較対象となるだろう。

さらに、いわゆる「大和」とは趣を異にするいわゆる「琉球・沖縄文化」の歴史的形成を考える際にも、台湾は極めて重要である。なぜならば、現在私たちが知ることのできる「琉球・沖縄文化」は、当然「大和」の文化と通底し、また中世・近世以降にもさまざまな影響も受けてきたが、他方で、例えば親族組織／祖先祭祀／年中行事／食文化などの分野では、14世紀後半に始まる中国諸王朝との朝貢関係、それに付随した人的・物的交流の影響も無視できないからである。この点に関しては当然、中国大陸との直接比較も必要である。しかし、共産党による社会主義化政策や文化大革命を経験していない「台湾の民俗文化」は、「琉球・沖縄文化」の在り方を考える上で、重要な参照点

となるだろう。この点で、1980年代から1990年代に盛んに行われた「環中国海の比較民俗学」的研究は、依然としてその学術的価値と発展可能性を保持していると言える。

また、現在の沖縄経済を考える時、堅調な伸びを示す観光部門における台湾人観光客の存在も重要である。2015年の入域観光客は776万人に達し（前年比10%増）、そのうち外国人観光客も150万人（前年比68%増）となったが、その第1位はこれまで通り台湾からの観光客（47万9,000人。外国人観光客の約32%）であった²。さらに、第二次世界大戦で多くの犠牲を出した沖縄県において、戦後の政治・経済・教育分野で台湾からの引揚者や台湾華僑・華人が担ってきた重要な役割を振り返るならば、ユーラシア大陸の東に浮かぶ極小島嶼社会である沖縄の未来を考える上で、「台湾」という存在（さらにはその先にある中国大陸や東南アジア）を無視することは不可能である。

おわりに

この小稿では、私自身が学術研究以外の分野で「台湾」を発信してきた細やかな試みを紹介した上で、「沖縄で台湾を考える／発信する」ことの意義として私が常に念頭に置いている所信を述べた。自然科学であるか人文社会科学であるかを問わず、学術研究に対しその成果の「市場価値」を性急に求めることはナンセンスであり、また時に危険ですらある。しかし、「社会的還元」を完全に無視した学術研究もまた、その存在意義を問われることになるだろう。琉球弧に住む人々が、この島々の歴史・現在・未来を再考する契機となるように、最も身近な隣国である「台湾を考え／発信」し続けること。それこそが、沖縄という島嶼社会で生まれ育ち、文化人類学そして地域研究という学問分野に身を置いて出身県の大学で教壇に立つ私（の研究）の、使命だと考えている。

1 漢族の概要／親族・社会組織／年中行事・宗教については同講義の別の回や「アジア社会文化論1」で言及しており、台湾の回で特別に取り上げてはいない。

2 沖縄県「平成27年入域観光客統計概況」（平成28年1月21日発表）〈<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/kikaku/statistics/tourists/h27-c-tourists.html>〉（最終閲覧日：2016年3月4日）

追悼

寒い冬の中で沸騰する台湾から

— Ben への手紙 —

呉叡人 (中央研究院)
訳・駒込武 (京都大学)

[訳者前書き]

昨年 12 月 13 日、ベネディクト・アンダーソン教授が旅先のインドネシアで亡くなりました。第 13 回学術大会で記念講演をされたことは、記憶に新しい。謹んで哀悼の意を捧げるとともに、学術大会で教授と対話を繰り広げた呉叡人氏による追悼文の抄訳を掲載することにより、感謝の意に代えることとしたい。著者の了解をえて前略・中略などの注記は省き、題名も変更してある。全文をお読みになりたい方は衛城出版のサイト (<http://whogovernstw.org/2016/01/01/rweirenwu4/>) をご覧いただきたい。

— . . . —

2011 年春、東日本大震災と福島原発の災害を自ら経験して、ようやく驚きから立ち直ったばかりの私は、日本台湾学会大会におけるあなたの基調講演への応答として、オリンポス山頂における精神の歷程を振り返った上で、厳しい質問をつきつけた。

「山頂からの比較史の視野では台湾は中国史から解放されようとしている。しかし、台湾は、地政学政治というもう一つの檻の中に幽閉されている。Quo Vadis Formosa? (台湾はどこに行こうとしているのか?)」

実際のところ、神でさえこの問題に対しては沈黙を守ることしかできないだろう。

Dear Ben、この理不尽で無礼な質問に対して、そしてまた生まれつき感傷的で、すぐに落ち込み、日増しに苦しみと悲観意識を強める私に対して、あなたはしかし、広い心と、暖かさ、智慧に満ちた回答してくれた。

回答のポイントは二点あった。

一点は、オリンポスの山頂に依然として立ちながら、急いで下山する必要はないことを思い起こさせてくれたことである。冷静になって観察すれば、少しも疑問の余地のない歴史の趨勢を観察することができるだろう。それはすなわち、古い老帝国が瓦解するというものである。

現実主義者の目からするならば決して動くことのない構造も、長期的な歴史の観点からするならば、実際のところ、まさに氷河が溶けるように、動きつつある。幽閉された靈魂は、かくして包囲をついに突破することができるはずである。

だから、オリンポスの山頂からの視野は弁証法的である。解放があり、困難があり、それから再解放が訪れる。

かくして、「賤民宣言」の経験はそのままではありえないことが論証される、とあなたは語った。

もう一点、あなたはまた、私という個人に対して実存主義的な回答を与えた。現実主義は現実を変えることはできない。ただ、政治的道德主義だけが、現実を改変することができる。

それから、あなたはグラムシのあの言葉を忘れずに思い起こさせた。optimism of the will (意思の楽観主義)！

率直に言えば、私は、あなたの回答に納得したと言い切ることはできない。一たぶん半分くらいだったと思う。

Dear Ben、あなたは、私が強い台湾アイデンティティの持ち主であり、台湾が独立自主で、いかなる強権の支配にも服すべきではないと主張してきたことをもちろん知っている。

この数年来、私は、乏しい能力で、普遍的で進歩的な価値の立場に適合した形で台湾の主体を論述する試みを発展させようと努力を重ねてきた。— サイドの言う「自己省察的なナショナリズム」、あるいはファノンの言う「社会内容と国際精神を備えた民族意識」という考えに接近しようとしてきた。

私は、ポストコロニアの領域で、進歩的民族主義にかかわる論述がそれほど多くあるとは思っていない。それでも、それは少なくとも、理論的根拠と論理的説得力を持っている。しかも、台湾社

会におけるこの20年来の本土化、民主主義の深化、公共社会の成熟という発展の趨勢に呼応するものでもある。

でも、このような考えも、いったん特定の国際的脈絡の中に置かれたならば一主に国際的な進歩左翼体制の観点からするならば、突然の問題に出くわしたかのように、「右派」の論述ということに総括されてしまう。社会政策において左翼的であり、民族政策において進歩的であり、性別政策において多元的であったとしても、台湾独立を主張するならば、右派であり、反動である。

このこわばった観点からするならば、「進歩的な台湾独立派」、「左翼の台湾独立派」という選択肢は一種の oxymoron (自己矛盾) であり、ありえないものである。

この数年来、私は東アジア、北米、およびヨーロッパにおいて、このような考え方を抱く各国の進歩的左翼知識人と接触してきた。また、そうした人びとの作品を少なからず読んできた。こうした経験を通じて、私は、地政学と資本主義ばかりでなく、「進歩的イデオロギー構造」によっても、台湾が封じ込められてきたことを自覚するようになった。

My dear Ben、あなたは、実際のところ私が気にかけているのは、「左」あるいは「進歩的」というカテゴリーに分類されるかどうかではないことをわかってくれるはずだ。

ルークス (Steven Lukes) のあの有名な駄洒落「what is left?」(左派とは何か? / 何がまだ残されているのか?) が示しているように、私たちのこの時代において、「左翼的」という言葉それ自体さえ、広範で深刻な検討と、整理と、再構成とを必要としている。レッテルを貼ることの意味は、本当のところは大きくない。

私が比較的残念に思っているのは、この「進歩左翼」(括弧を加える) による偏見の構造が、この百年来、台湾人民が自身の命運を掌握し、自由、平等と多元的価値を追求してきた、高貴な歴史的的努力をいとも簡単に否定してしまうことである。さらには、台湾人民と世界のつながりを否定し、進歩的で普遍的価値の実現を追求する貴重な経験が世界に貢献する可能性を否定してしまうことで

ある。

この偏見は、人類の共有すべき貴重な進歩の遺産を抹殺するだけではなくて、同時に、人類共通の未来の進歩に貢献する可能性のある連携をつくることも妨害する。

アーレントの表現を借りるならば、この偏見は、台湾人が共同の世界に属し、参与する権利を不公平な形で剥奪するものなのだ。

最初、私は、これは基本的にひとつの知識の問題だと考えた。一よきはっきりと説明しさえすれば、誤解は自然と氷解するはずだと考えた。

しかし、何度もコミュニケーションの挫折を経験した後で、これは実際のところ政治問題なのだと考え始めた。一中国の強大な実力が、台湾の正当性にかかわる一切の論述と実践を圧倒しているのである。

しかしこの数年の反省において、私は権力政治の背後に、深く根を張った強大な意識型態を見出すことになった。一あなたの言葉を借りるならば、「議論に鈍感 (impervious to argument) な意識形態が存在し、現実を歪曲したり、隠蔽したりして、人びとの意思疎通と連携を困難としているのだ。

Ben、それから、私は、ホブズボームのあの精彩に満ちた自叙伝『わが20世紀・面白い時代』(Interesting Times) を読んで、この問題についてさらに深く理解することができた。

自叙伝の中で、ホブズボームは、1956年の第20回党大会でフルシチョフがスターリンの罪状を公開し、イタリア共産党が「欧共主義」路線に転換したにもかかわらず、それでも英国共産党籍を保有し続けた理由を次のように説明している。少年時代にウィーンで社会主義啓蒙の影響を受け、1917年のロシア革命勃発という偉大な夢の余波の中にあつたため、共産主義の信念を喪失することはなく、終生、共産党員の身分を放棄することもなかった。

そこで私は忽然として悟り、理解した。歴史上の偉大な革命がどのように知識人の道徳的な感情、政治的想像、世界を観る方式を形作り、ある世代の知識人全体、はなはだしくは数世代にわたってその影響が持続することを。さらに、ひとつの安

定した構造が形成されるや、この構造が日増しに歴史発展の軌跡と乖離したとしても、後から続く者の進路や選択を制約することを。

1917年のロシア革命が戦中・戦後初期世代のヨーロッパの知識人の世界観を形作ったように、1949年の中国革命は、冷戦、ないし冷戦後の時期の、国際的な進歩的知識人による中国および世界の理解のしかたに深い影響を及ぼしている。

今日にいたるまで、東北アジアに関して、台湾海峡に関して、中国革命が創造した歴史意識は、知識人に対して巨大な影響力を発揮し続けている。革命はすでに裏切られている。しかし、革命はまだ過去のものではない。

親愛なる Ben、もうひとつの歴史の変局の前夜にある台湾は、寒い冬の中で沸騰している。この時に、あなたはすでに、あの辺境の「生まれ育った村」で心地よい就寝の準備をしているのだろう。どうかしばらくそこでからだを横たえて休んでほしい。一休みだ。来年春の「発水節」の時期を待って、またあなたをバンコクで探すことにしよう。

Warmest Regards,

亅人

2015.12.31 南港

ベネディクト・アンダーソンから 学んだこと

山口 守 (日本大学)

2011年5月早稲田大学で開かれた第13回学術大会は、個人的に二つの意味で忘れられない大会だった。一つは入会当時想像もしなかったが、理事長に選出されたこと。もう一つはベネディクト・アンダーソンの記念講演を聞くことができたことである。特に講演は、アジアの近代文学とナショナリズムや国語の関連を考える者にとって意義深いもので、また個人的にも深い感慨と共に鮮明に記憶に刻まれる体験だった。とりわけ講演の中でアンダーソンの語った emotional attachment と shame and pain という言葉に深く

考えさせられた。後に学会ニュースレターにも書いたが、その言葉を聞いてすぐに思ったのは、台湾の社会や文化に愛着を感じて研究するならば、研究者としての自省だけでなく、対象とする台湾の社会や人々の痛みへの想像力を欠いてはならないということであった。長い異民族統治下で苦しむ原住民族の人々、半世紀に及ぶ日本の植民地統治によって流れされた夥しい血と涙、冷戦体制と戒厳令にも関わらず果敢に自由と民主を求めた人々の苦闘、そうした台湾の社会や人々の痛みを深く理解することなしに台湾研究を行うことはできないと、講演を聞きながら改めて深く認識させられた貴重な体験だった。

個人的なことを言えば、私は中国の巴金というアナキスト作家を研究する過程で、ナショナリズムの機制を解明することより、常にナショナリズムへの批判的視点を探し求めることに関心を抱いてきた。ナショナリズムの結束力よりも、国家や民族から離脱する拒否思想の方に強く惹かれるからである。そのためアンダーソンの『想像の共同体』を、ナショナリズムが生み出されてしまう原因を探る書として読む傾向があった。国語と共同体の関係を示した有名なフレーズ「ときにナショナリスト・イデオログがやるように、言語を、国民というものの表象として、旗、衣裳、民俗舞踊その他と同じように扱うというのは、常に間違いである。言語において、そんなことよりずっと重要なことは、それが想像の共同体を生み出し、かくして特定の連帯を構築するというその能力にある」(VII章・最後の波)も、初めて読んだ時はその的確な分析に感銘しながら、一方で「だから国語形成には大きな問題があるのだ」というナショナリズム批判を前提とした考えが同時に脳裏にあった。そのままコロナル・モダニティを考える機会を持たなければ、私の『想像の共同体』理解はいまだにその水準に留まっていただろう。しかし台湾文学に魅せられて、その日本語作品に目を向けるようになると、帝国が植民地で強制した言語が国語として機能する場合、台湾の人々にとって国語と近代文学の関係はどうなるのだろうかという大きな問題にぶつかることになった。特に楊逵や呉濁流を研究対象とする場合、『想像の共同体』

はこの問題を解析する大きな手掛かりを与えてくれた。

例えば、呉濁流は『夜明け前の台湾』で「台湾は過去五十年間、日本の植民地としてわずかに三つの出路しか与えられていなかった。一は医者で、二は下級官吏で、残りが弁護士であった。これが日本の台湾統治中最も賢明な策であった。日本の植民政策がこの三つの道を台湾人に与えたために、台湾が五十年間小康を得たと言っているのである。前の二つの道の推進のため、医学校と国語学校(師範学校)の二つの学校を作った。一つは自費で、一つは官費である。それが最も巧妙な方法で、したがって台湾の中産階級以上の優秀分子はみずから自費の学校に馳せ、中産階級以下の優秀分子は官費の師範学校へと馳せたのである。」と書いているが、これを読んだ時、思わず『想像の共同体』の中の「植民地国家の拡大は、現地の人間をいわば学校とオフィスに招待し、植民地資本主義の拡大は、かれらを、いわば重役室から排除した。植民地ナショナリズムの初期の代弁者が、遅しい現地ブルジョワジーとは無縁の、これまでになく孤独な二重言語のインテリゲンチアであったこと、それはこのためであった」(VII章・最後の波)を思い起こし、アンダーソンが分析する初期植民地知識人の姿は、ほとんど呉濁流に重なるように思えた。

その認識を元に呉濁流と国語問題から、更には郷土文学へと関心が移って行ったが、それまで国語概念を国家語と国民語の二項でしか考えていなかった私は、台湾文学を読むことを通して、個人空間と公共空間の言語関係についても考えるようになった。その際、『想像の共同体』(III章・国民意識の起源)で、生産システム・生産関係(資本主義)・コミュニケーション技術(印刷・出版)・人間の言語的多様性の間の宿命的で、偶然で、爆発的な相互作用によって新しい想像の国民共同体が出現するとの見解は実に示唆的であった。台湾文学について考える時、言語的多様性、或は文学制度・市場の問題への視点が欠かせないことは当然だが、それを社会というマクロ空間ばかりでなく、創作や読書の個人空間においても重要視しなければならぬと考えるようになり、その後、原

住民族の漢語文学や台湾在住華人作家の華語語系文学へと研究は進んだ。

こうした台湾文学と『想像の共同体』の学習・研究過程を振り返ると、台湾文学が私の『想像の共同体』理解を高め、また一方で『想像の共同体』が私の台湾文学理解を高めてくれたと言っている。その意味では、成績は芳しくないが、私は台湾文学から学ぶ学生であり、ベネディクト・アンダーソンから学ぶ学生でもある。

台湾、日本、アンダーソン

梅森直之(早稲田大学)

ナショナリズム研究の泰斗として知られるベネディクト・アンダーソン教授が、講演先のインドネシアで急逝されたのは、2015年12月13日のことである。ご承知の通り教授は、2011年5月の日本台湾学会第13回学術大会に基調講演者として参加された。アンダーソン教授の招聘にあたっては、呉叡人氏と加藤剛京都大学名誉教授のお二人にご尽力をいただき、また私自身も、コーディネーターとして、アンダーソン教授と親しく接する機会を得た。いまいちど、アンダーソン教授が、早稲田大学でわれわれと共有してくれた貴重な時間を思い起こし、教授に対する感謝と哀悼の言葉を記したい。

アンダーソン教授は、徹頭徹尾平民的な人であった。アンダーソン教授を早稲田へ招聘するにあたっては、『想像の共同体』の台湾版の翻訳者でもあるわたくしの友人呉叡人氏に大変お世話になったのだが、わたしはアンダーソン教授と呉叡人氏のあいだに、作者と翻訳者という関係をこえた、家族のような親密な関係が成立しているのを感じていた。また、二度目の招聘でお世話になった加藤剛京都大学名誉教授が、コーネル大学でかつて師事したアンダーソン教授に対し、「ベン、ベン」と、親しく呼びかけておられたのも印象的であった。わたしも、初期のメールでは、Professor Anderson という呼びかけを用いていたのだが、それを教授から Ben-san と訂正されて以後、直接

会ったときも「ベンさん」と呼びかけるようになっていった。世界的な学者であるアンダーソン教授は、ときにやさしく、ときにシニカルな、いたずらっぽい眼をしたベンさんだった。

ベンさんは、若い学生たちと議論することを好んだ。どんなに疲れていても、またスケジュールがタイトでも、オフィシャルなスケジュールに加えて、インフォーマルな学生との懇談会を設定し、そこで学生たちと議論する時間を大切にしていた。それは、早稲田でのシンポジウムでもそうであったし、また台湾でわたしが個人的に参加した国際会議でも同様であった。そうした機会にベンさんは、常に学生たちを、当該社会における専門家として遇し、真剣に聞き取りをおこなっているように見えた。加藤剛先生が、ベンさんが、あれほど東南アジアの人々から好かれたのは、かれが現地の言葉を真剣に学び、現地の言葉を通じて、コミュニケーションをとろうとしていたからではないかとおっしゃっていた。そういえば、ベンさんは、台湾について講演する際にも、「自分が中国語ができない」というお詫びから、口火を切るのが常であった。ベンさんの学問の根幹には、ローカルな社会に生きる市井の人々の暮らしに対する深い敬意と好奇心が存在していた。

学生たちが、ちょっと挨拶するつもりで、ベンさんに近づいていく。そこでしばらくベンさんを囲んでひととおり話しがはずんだのち、その学生たちが退場する。するとそこに、また新しい学生が登場し、新しい対話が始まる……。わたしは、こうした光景を、早稲田でも、また台湾でも、ベンさんを迎えた国際会議で、なんども目撃した。それはわたしに、「道場」でおこなわれる「かかり稽古」を連想させた。若い「門人」たちが、果敢に「師範」に挑んでゆく。「師範」がその挑戦を巧みに捌くと、また新しい「門人」が登場し、さらに稽古が続いていく。ベンさんは、きっとこうした「道場」を、これまで、世界中で、幾度となく開いてきたのだろう。そしてこうした非公式なベンさんの「門人」の数は、きっと世界中で、かなりの数にのぼるに違いない。そしてそうした「門人」たちは、きっといまのわたしと同じように、ベンさんとの「稽古」を、懐かしく、そして悲し

い気持ちで、思い出していることであろう。まだ見ぬ「門人」たちとのこうしたつながりを想像することは、今のわたしにとって、このうえもない慰めとなっている。いまわたしは、ベンさんが、そうした「道場」を、日本台湾学会という場所で開いてくれたことを、とてもありがたいと思っている。そして日本の若い学生や研究者たちを、そうした「門人」に加えてくれたことにも、深く感謝している。

アンダーソン教授の『想像の共同体』という著作には、両義的な魅力があった。高度に理論的な分析でありながら、同時に感情的な訴求力も兼ね備えていた。ナショナリズムの「過剰」によって苦しんでいる人たちは、そこからの解放の可能性を、またナショナリズムの「不足」によって苦しめられている人たちは、そのよりよき創造の可能性を、ともに本書のうちに探求していった。日本で、本書は、いわゆる国民国家論の台頭のなかで、ナショナリズムを脱構築するためのバイブルとして人気を博した。しかしながら、台湾の人たちは、ナショナリズムの「最後の波」を論じた本書の先に、台湾の現在を見定めていたのである。日本では、アンダーソンが解釈されたのに対し、台湾では、アンダーソンは実践された。『想像の共同体』は、あたかもリトマス試験紙の如く、日本と台湾の現在の差異を映し出している。

ひまわり運動からこのたびの総統選挙での民進党の圧勝で、台湾国内におけるナショナリズムをめぐる戦線には、一定の決着がついたように思われる。しかしながらこのことは、けっして闘いの終わりではなく、むしろ国際社会における、より困難な闘いの始まりを意味しているにすぎない。台湾は、このタイミングで、台湾ナショナリズムにもっとも理解と同情の深かった世界的知識人を失ったことになる。「師範」はもう存在せず、われわれ「門人」は、それぞれの場で、自分たちの闘いをおこなっていくしかない。「台湾を救うものは、そのナショナリズムとアイデンティティの創造的な変化のかたち」であるというのが、ベンさんのわれわれへのメッセージであった。そしてそれは、けっして台湾の人のみに向けられたメッセージではなかったはずである。

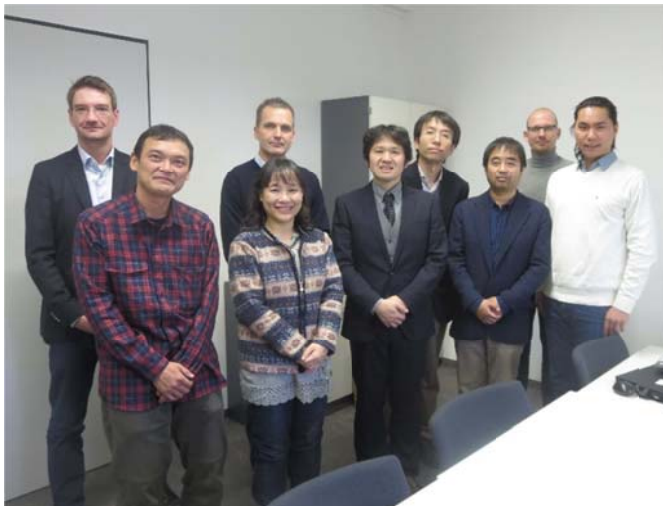
学界動向

欧州現代台湾研究センター訪問記

山崎直也（帝京大学）

2015年11月23日、科研費基盤研究B「『中国』をめぐるアイデンティティとナショナリズム」（研究代表者：阿古智子・東京大学）のメンバーを中心とするドイツの東アジア研究機関との学術交流活動の一環で、エバーハルト・カール大学チュービンゲン(Eberhard-Karls-Universität Tübingen)の欧州現代台湾研究センター(European Research Center on Contemporary Taiwan: ERCCT)を訪問した。

5名の日本人・台湾人研究者によって構成された訪問団は、ERCCTのセンター長でチュービンゲン大学アジア・東方研究機構(Institute of Asian and Oriental Studies)の中華圏研究(Greater China Studies)部門を統括するギュンター・シューベルト(Gunter Schubert)教授(写真後列左2)による2つの授業を見学した後、数時間にわたる意見交換を通じて、同センターの活動に対する理解を深めるとともに、日本及び欧州の台湾研究者の交流拡



大の可能性について議論を交わした。

意見交換には、センター長のシューベルト教授、執行長のステファン・ブライグ(Stephan Braig)氏のほか、数名の研究員が参加したが、ブライグ氏のプレゼンテーションにより、同センターの着想、コンセプト、目的について理解を深めることができた。

欧州と台湾の学界の関係強化を目的に、台湾の蔣経国基金会とチュービンゲン大学の共同事業として2008年にスタートした同センターの最大の特徴は、博士課程／ポストドクレベルの若手研究者による実証的な台湾研究の支援に軸足を置き、ヨーロッパにおける台湾研究の発展を長期的なスパンで構想している点にある。既に大学に職を得た研究者を対象とする受入れプログラムもあるが、重心はあくまでこれから大学・研究機関に職を得て台湾研究の明日を担う欧台の若手研究者の研究奨励にある。博士課程学生及びポストドクをチュービンゲン大学に迎える短期訪問プログラム、若手研究者ワークショップ、Routledge Research on Taiwan Seriesを含む出版社への橋渡しなど、充実した研究支援プログラムが展開されている。同センターに滞在する訪問研究者には、台湾コロキウムでの発表が義務づけられており、そのことが同センターを台湾に関する知的共有のプラットフォームたらしめている。欧州台湾学会のニュースレター(EATS NEWS: 同学会のウェブサイトダウンロード可能)の第2号(2013年6月)で同センターの活動の詳細が紹介されているので、興味のある方はぜひ参照されたい。同センターの主眼は、欧州と台湾の研究交流の発展にあるが、日本

の研究者に開かれた機会もあり、シューベルト教授からも日本の台湾研究との関係の発展に期待している旨の発言があった。今回の訪問が台湾研究における日欧交流のささやかな最初の一歩となることを祈りつつ筆を擱きたい。

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会

担当理事：小笠原欣幸（東京外国語大学）

第 105 回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所

日時：2015 年 10 月 16 日（金）18:20～20:30

場所：早稲田大学3号館3階306号室

報告：鈴木哲造（中京大学）

司会：春山明哲（早稲田大学）

題目：台湾総督府医学系職員の任用・構造・系譜について

参加人数：12名

活動報告：

本報告は、台湾総督府の医学系職員の人事や系譜に、近代日本で形成され、植民地統治下の台湾にも投影されていく医師社会の階層性と学歴主義的な秩序および学閥が与えた影響について、台湾総督府医局勤務医を事例として考察するものである。報告者の研究は、先行研究では明らかにされていなかった、近代日本における医師社会の階層性の台湾への反映過程にあらわれた学歴と学閥の関係、医学系職員の任用過程と人的ネットワークに焦点を当てるといふ意義をもつ。

報告者によれば、1899年に創立された台湾総督府医学校（1922年に「台湾総督府医学専門学校」）が台湾医師社会の形成において大きなプレゼンスをもっていた。特に1920年代以降は、台湾総督府医学系職員の任用過程における学歴と学閥と重要性、その人材の養成から確保にいたる過程を台湾内で自己完結的に進めるようになったとともに、総督府医学専門学校から総督府医局医官補への人材供給ラインが確立された。また、帝大卒、学位といった経歴や総督府医局でのポストなどをめぐって台湾人医師の学歴主義的秩序による包摂と排

除が展開されたことが明らかにされた。（記録者：遠藤正敬）

第 106 回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、東京大学東洋文化研究所、科研基盤B（代表：松田康博）

日時：2015年2月5日（金）18:00～20:15

会場：東京大学東洋文化研究所3階303会議室

題目：2016年台湾総統選挙・立法委員選挙の分析

司会：若林正文（早稲田大学）

報告：小笠原欣幸（東京外国語大学）

コメンテーター：松田康博（東京大学）

伊藤信悟（みずほ総合研究所）

参加人数：109名

活動報告：

若林正文氏の司会のもと小笠原欣幸氏より、2016年1月16日に投開票が行われた台湾の総統・立法委員選挙の結果分析と、今後の台湾政治の展望について報告があり、松田康博氏と伊藤信悟氏がコメントを行った。

報告者によると、今回の選挙結果は、第一に、民進党が立法院の過半数を獲得した実質的に初めての政権交代を意味する。第二に、国民党の歴史的役割は終了したことを示している。国民党は地盤、資金、路線、人材すべての面で前途多難であり、今後は「3分の1政党」に向かうだろう。今回の選挙は、二大政党間の「スイング」ではなく、台湾政治の構造を変えた「地殻変動」を意味している。2014年の「ひまわり運動」に象徴される公民運動が政治の力に転化された「歴史的な選挙」であったという評価が提示された。

会場からは的を射た質問が相次ぎ、議論が深まった。日本台湾学会定例研究会始まって以来最多の109名の参加者で、会場は椅子が足らなくなり立ち見の人が出た。研究会は、台湾の「歴史的」選挙を反映した熱気に包まれたまま終了した。（記録者：家永真幸）

定例研究会
関西西部会研究大会

担当理事：澤井律之（京都光華女子大学）

関西西部会では、去る12月19日に名古屋市立大学にて第13回研究大会を開催した。プログラムは以下のとおり。

- ① 戦後日本における台湾独立運動の初の挫折—
連合国軍当局による廖文毅の逮捕をめぐる交渉
郭鋭（神戸大学・院）
評論：浅野豊美（早稲田大学）
- ② 日本統治期台湾の農家経営—養豚によるエコ
システムの分析
中嶋航一（帝塚山大学）
評論：堀内義隆（三重大学）
- ③ 災害復興の国際比較からみる移民社会台湾の
特質と民主化の成果
陳來幸（兵庫県立大学）
評論：今井淳雄（天理大学）
- ④ シンポジウム 東山彰良『流』～直木賞受賞
作を読む
パネリスト：二宮一郎（大阪府立桃谷高校）・
和泉司（豊橋技術科学大学）・星野幸代（名古屋
大学）

①郭鋭氏は、戦後初期の台湾独立運動における廖文毅について、中華民国政府やGHQとの関係から米中の檔案資料をもとに論じた。

②中嶋航一氏は、日本統治期の養豚業について、詳細なデータに基づき、生態系システムを構築し合理的な経営がなされていたことを究明した。

③陳來幸氏は、1999年の九二一地震、2009年の八八水害等を取り上げ、台湾での現地調査に基づき、社会運動や慈濟基金會の活動等について論じた。

④シンポジウムは関西西部会で企画した。昨年度上半期の直木賞を受賞した東山彰良『流』を様々な角度から論じた。

二宮氏は、関係資料を渉猟し、東山彰良の特徴を論じた。『流』は、台湾出身の外省人である彼の特殊な経歴によるがゆえの産物なのではなく、そ

れを超える彼の「オリジナリティー」に基づく賜物であると二宮氏は述べ、『流』以前の作品をも再評価し、今後も活躍するに違いないと自らの見解を披露した。

和泉氏は、直木賞を受賞するまでの過程を論じ、作者と『流』の出版元の講談社とが直木賞を戦略的に狙ったものであることを明らかにした。「<ルーツ>に価値・意義を求める日本の<文学賞>の傾向」を指摘し、『流』のみによって作者を評価する傾向に対して警鐘を鳴らした。

星野氏は台湾映画『牯嶺街少年殺人事件』（1991）、『モンガに散る』（2010）、『あの頃、君を追いかけた』（2011）等を引き合いに出し、『流』の表象を分析した。『流』はオリジナルな物語ではあるが、様々な台湾表象を巧みに取り込んでいることを仄めかし、『流』の解析方法を暗示し、示唆的であった。

定例研究会
台北

担当幹事：富田哲（台湾・淡江大学）

第71回台北定例研究会

日時：2015年10月24日（土）15:00

場所：台北教育大学行政大楼A605室

報告者：駒込武（京都大学大学院教育学研究科）

テーマ：台湾植民地支配と『国家神道』—台湾政
治史研究の方法論再考

使用言語：日本語

— . —

学会運営関連報告

担当理事：星名宏修（一橋大学）

第9期理事会

第1回常任理事会議事録（抄）

日時 2015年7月12日（土）14:30～
場所 日本大学文理学部本館1階会議室C
出席 川上桃子、北波道子、洪有妃、佐藤幸人、垂水千恵、星名宏修、三澤真美恵（以上常任理事）、沼崎一郎（第17回学術大会実行委員長）、松金公正（第18回学術大会実行委員長）
委任状 上水流久彦、松田康博
主宰 佐藤理事長
書記 家永真幸

報告

1. 理事長・事務局

(1) 佐藤理事長

①新理事長就任の挨拶について

6月12日に代表処に新理事長就任の挨拶に行った。

台湾協会（河原さん）は15日に訪問した。

交流協会（小松部長、鳴海さん）は19日に訪問した。

②事務局について

事務局はアジ研に置き、今のところ理事長が対応をしている。前事務局の井関さんから新事務局の鶴岡さんへの引継ぎは5月で完了した。

(2) 星名総務担当理事

①入退会申請書を回覧。

②会費4年間未納者リストを回覧。知り合いがいたら督促してほしい。

2. 各業務担当

(1) 星名総務担当理事

第8期第3回理事会、第9期第1回理事会、第9期第1回総会の議事録をHPに掲載する。

(2) 北波会計財務担当理事

学会報郵送時の同封物を決定する必要がある。電子化にともない、毎年必ず郵送するものはもは

や学会報しかない。

(3) 上水流編集委員長（代理報告：松金）

会報第18号の「投稿及び原稿執筆要領」について書面報告がなされた。

（佐藤前編集委員長より）

第17号は7月中の発行は難しく、8月になる。6社から広告掲載の依頼が来ている。

(4) 川上企画委員長

新しい企画委員の顔ぶれが決定した。副委員長に菅野敦志会員。委員に赤松美和子会員、林成蔚会員、富田哲会員、宮崎聖子会員。

(5) 洪広報担当理事

①ニューズレターは9月末ごろの刊行を目指して準備中。

②HPの更新は引き続き山崎幹事が担当しており、順調。

(6) 松田国際交流担当理事

特になし。

(7) 三澤文献目録担当理事（松金前担当理事より）

2014年度末の登録数は12441件。今年度の3ヶ月で456件増え、6月末時点で12895件になった。鶴園会員に過去のサーベイをやってもらっているので増加した。

(8) 北波関西西部会担当理事

12月19日に名古屋で大会開催を予定している。

3. その他

特になし。

議題

1. 第17回学術大会について（沼崎大会実行委員長）

配布資料に基づき、第17回学術大会の運営について総括がなされた。

・電子登録制を導入した。はがき登録制より登録が増えたのではないかと。

・「昼休みなし」については特に苦情がなかった。ただし、分科会の数など様々なことが3月の理事会で決定するのでは、対応が大変。

・口座はいままで大会ごとに作っていたが、回数はずして「実行委員会」の口座を使いませば

よいのではないか。代表と住所とハンコを変えればよい。

・今回は書店を出せなかった。物品販売を禁じる国立大が増えている。

2. 第 17 回学術大会決算報告 (沼崎)

決算案と証憑書類が回覧され、承認された。

(三澤前会計財務担当理事より)

・会場使用料は予算から大幅に増加したが、印刷費などで吸収してもらった。

・交流協会からの共催費は 40 万円 (昨年度までは 50 万円)。すでに承認されているが、未入金なので次回の常任理事会で報告する。

・分科会で非会員への謝金が発生した。額は編集委員会での非会員への査読の謝金に照らし、5000 円とした。

3. 第 18 回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要項について (川上)

配布資料に基づき、標記の件につき審議がなされた。

4. 『日本台湾学会報』第 18 号の投稿および原稿執筆要領について (上水流、代理報告：松金)

書面にて原案が提示され、承認された。

・上限を「枚数」から「字数」に変更する。

・18 号では東北大会の特集を入れる。沼崎委員長による全体紹介を掲載する。分科会については査読を設ける。

・次の編集委員会は 11 月 22 日。書評は松田京子委員に依頼することが決定している。

・刊行は 6 月末とする (通例は 5 月末で大会に合わせるが)。

(佐藤理事長)

数年前より投稿が増えている。嬉しい悲鳴。数が足りないのが一番困るので、周りの人の背中を押してほしい。

5. 第 18 回大会について (松金)

準備状況について報告がなされ、承認された。

①日程について

2016 年 5 月 21 日とする。人類学会と重なって

いないことは確認した。記念講演者の都合が合わない場合に備え、念のため 22 日も会場を押さえてある。

②実行委員会の承認

招聘者の対応は副委員長の西村会員。今井淳雄会員 (元指導学生) に会場責任者を依頼する。電子化は萩原豪会員。講演会担当に野嶋剛会員。非会員で松村史紀さん、高橋里衣さん (修士卒業生) に入ってもらおう。

③講演会計画について

シンポジウムは実行委員会の体力的に難しいので、講演会にしたい。劉金標ジャイアント会長を招致したい。

④会場校企画

上水流さんに 1 つお願いする。ほかに、宇都宮高等農林関連台湾資料を展示できれば良いと思っている。

⑤費用

9 部屋確保してある。

⑥一般傍聴について

共催にするなら一般傍聴を認めなくてはならないが、どうするか？

⑦託児

「宇都宮大学まなびの森保育園」を使う。

⑧食事

弁当にしたい。コンビニはある。

⑨理事会：

前日の 5 月 20 日、A 棟で理事会を開催できる。

⑩アルバイト

15、6 人は確実に集められる。学部生が中心になる。

⑪機材

機材は貧弱。Wi-Fi は無理。

⑫口座

口座は新たに作るつもりでいた。いずれにしても銀行口座が必要。郵便局は名義変更で良い。

6. 会員の入退会について

4 名の入会と 1 名の退会が承認された。

(佐藤理事長)

学会報送付時に、滞納者への督促と振込用紙を入れる。ただし、2 年以上滞納するとそもそも学会報が送られない。

7. 次回の常任理事会の日程について

2015年12月13日(日)に開催する方向で準備を進めることが決定された。

8. その他

佐藤理事長より、規約改正に向けたブレインストーミングをしたいと提案がなされた。次回理事会で決議、3月の常任理事会での成文化を目指す方針が確認された。

以上

第9期理事会

第2回常任理事会議事録(抄)

日時：2015年12月13日(日) 14:00-17:50

場所：東京大学東洋文化研究所3階第1会議室

出席：上水流、川上、北波、洪、佐藤、星名、松

田、三澤(以上常任理事)

松金(第18回学術大会実行委員長)

委任状：垂水

主宰：佐藤

書記：家永

報告事項

1. 理事長・事務局

(1) 佐藤理事長

①事務局にPCを1台購入した旨、②学会報残部につき、50部を超える分を処分した(未廃棄につき必要があればまだ提供できる)旨、報告された。

(2) 星名総務担当理事

特になし。

2. 各業務担当

(1) 星名総務担当理事

特になし。

(2) 北波会計財務担当理事

①交流協会から振込みがあった旨、②会費収入が少なく督促が必要である旨、報告がなされた。

(3) 上水流編集委員長

配布資料に基づき、査読結果、書き直し期限、

書評担当者について報告された。

(4) 川上企画委員長

企画自由論題報告を締め切り、計18の応募があった旨報告された。

(5) 洪広報担当理事

山崎幹事による集計に基づき、現時点でのメール配信登録アドレスは448件で、内訳は会員440件(415名)+賛助会員(書店等)7件+事務局1件である旨報告された。NLについては、北村幹事の編集により29号が無事刊行された旨、30号は3月末発行予定で、31号以降の編集担当者はこれから打診する旨、報告された。

(6) 三澤目録担当理事

「戦後日本における台湾関係文献目録」につき、2015年11月末現在、鶴園会員による目録採録作業の最新データは13,530件で、3月末から1,089件の増加、HPの7月更新時からは1,199件の増加である旨報告された。

(7) 松田国際交流担当理事

台北駐日経済文化代表処教育組との恒例の懇談会があった旨報告された。

(8) 北波関西西部会担当理事

12月19日に名古屋市立大学にて研究大会が開かれる旨報告された。

3. その他

佐藤理事長より、会報第16号の残部が少なく、これ以降はPDFでの配布となる旨報告された。

議題

1. 第18回学術大会について

(1) 分科会企画・自由論題報告について(川上理事)

①配布資料に基づき、18あった応募のうち、1本が取り下げ、2本が不採用で、15本を採用した旨報告され、承認された。

②佐藤理事長より、講演会にあわせたセッション企画を立ち上げる構想について提起された。佐藤理事長が調整を継続することが承認された。

③国外からの大会セッション登壇者への経費補助申請があり、採否が審議された。今回の経費補助申請には応じられないことが決議された。

④川上理事より、査読の採用、不採用の連絡文面について回覧され、承認された。

(2) 会場校の準備状況について(松金実行委員長)

松金実行委員長より、2016年5月21日(土)の一日開催とすることが報告され、大会運営の具体的な方法について審議に付された。実行委員会の構成ほか基本的な運営方針は承認され、費用などの諸事項については継続審議となった。

(3) 大会予算案について(北波理事)

講演会、補助員雇用、論文集印刷等の費用について審議され、引き続き実行委員会が調整を続けることが承認された。

2. 規約改正について(佐藤理事長)

佐藤理事長より規約改正の草案が提起され、修正が審議された。次回総会に向けて調整進めることが承認された。

3. 会員の入退会について(星名理事)

入会申請書類が回覧され、9名の入会と3名の退会が確認された。

4. 次回の常任理事会の日程について(星名理事)

3月5日(土)14:00-17:00の開催が内定した。主な議題は大会関係で、プログラムと予算を確定する必要がある。

5. その他

①上水流理事より、学会報掲載論文を投稿者の所属大学HP内のレポジトリにて公開してよいか照会があった旨報告され、審議に付された。本件に関しては編集委員会で審査して決定することが承認され、今後の規程変更については継続審議となった。

②上水流理事より、学会報の書評に関する投稿規程について、次回の理事会で整理したい旨問題提起された。投稿規程変更の必要有無などについて3月までに整理し、再審議することとなった。

③星名理事より、独立行政法人大学評価・学位授与機構からのアンケート依頼について報告され、回答の必要有無について審議された。

以上

* 本号では、特集「〈台湾研究〉を発信する」を組みました。台湾研究を続けるなかで、学術研究とは少し異なる次元においても〈台湾研究〉または〈台湾〉を発信するという営みに関わる機会がそれぞれにあることと思います。そうした日常の場における試みや揺さぶりの経験を共有できることもまた貴重なことに感じます。それが台湾研究の新たな課題や可能性を探っていくきっかけともなっていけばと考えます。

* 2015年12月、ベネディクト・アンダーソン氏が逝去されました。第13回学術大会の記念講演の場で他の登壇者たちと楽しそうに議論されるお姿を拝見したのは5年ほど前のことです。寄せられた追悼文を掲載するとともに、謹んで哀悼の意を表します。

* 会員の皆様には、台湾研究に関わるシンポジウム・研究会・展示の企画・参加記や、学術交流の動向等の積極的なご投稿をお待ちしております。年2回発行のニュースレターが学会ホームページとは異なる情報共有・記録の媒体となれば幸いです。

(北村嘉恵)

日本台湾学会ニュースレター 第30号

発行：日本台湾学会(代表 佐藤幸人)

発行年月：2016年3月

■日本台湾学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2

アジア経済研究所 佐藤幸人研究室

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

北海道大学教育学部 北村嘉恵研究室気付

E-mail: jats-newsletter@eis.hokudai.ac.jp